
フュースト

風白狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フュースト

【Nコード】
N6251Z

【作者名】
風白狼

【あらすじ】
 辺境の土地に住む青年、楼青。彼の幼なじみの少女、凜麗。彼らの旅が、人々の過去と未来を揺るがす鍵となる…

決意

きっかけが何なのか、自分でも分からない。けれどその青年は、何かに憑依されたかのように実行を決意していた。それも、準備は誰にも気付かれないようにして。おかげでかなりの時間を費やしてしまった。だが、青年にとってそんなことはどうでもよかった。実行さえできてしまえば。藍玉色の瞳に、鋭い眼光が灯る。外は闇に包まれ、辺りは静まりかえっている。動く者の姿も認められなかった。どうやら誰にもこのことは気付かれていないようだ。ただ、アイツ（・・・）に悟られていなければいいのだが…。

青年は自分の前にかばんを広げた。ざっと中身を確認する。必要な物を忘れていないか、余分な物を入れていないか。不備があれば元も子もない。念入りの最終チェックをし、かばんの口を閉めた。それを引っつかみ、青年は極力音を立てないようにして闇の中に溶ける。そのまま自分の故郷をあとにした。

月明かりすら頼りにできぬ闇夜を、青年——ロウセイ楼青は足早に歩いていった。夜が明ける前に、できるだけ遠くへ行きたい。いつの頃からか、楼青は強くそう思うようになっていた。険しい山の山頂で暮らす、閉鎖的な村。人の行き来などあるはずがない。そんな環境が、青年にとって苦痛だった。自由になりたい。外に広がる未知の世界を、歩いてみたい。だからこそ彼は、こうして村を出、旅をすることを決意した。元々人の出入りが禁じられている村だ。抜け出したことがバレれば、ただでは済まされないだろう。

手入れの入らない森の中を駆け抜ける。もう、戻ることは許されない。しかしそれでよかった。こうなることを覚悟で旅立ちを決意したのだから。

どれほど時が経っただろうか。薄暗い森は途切れ、道も平坦になっている。人里ではなく人家も見あたらないが、山を下りきったことにひとまず楼青は安堵した。辺りにはまばらな草原が広がっている。青年は山から遠ざかりながら、風雨をしのげそうな場所を探す。

その時だった。とある茂みの中から猛獣が躍り出て、楼青に飛びかかった。すんでの所でそれをかわすが、相手は攻撃の手を休ませようとはしない。避けきれずによるめいた青年に、即座に襲いかかる。楼青は自らの死を感じ、ぐっと目をつぶった。

だが、その瞬間は訪れなかった。恐る恐る目を開けると、背の高い見知らぬ男性が目の前にいた。この男性があゝの猛獣を追い払ったのである。事はすぐに分かった。細身でありながら筋肉質な体が窺える。赤っぽい髪の毛が光を反射し、ブラウンの瞳が青年を見た。楼青はたたずまいを直してからお辞儀した。

「あの、危ないところを助けていただき、ありがとうございます。」

「大したことじゃない。無事で何よりだ。」

男性の低い声が返る。彼は得物を納めた。

「…一人か？ここはさっきみたいな猛獣だらけだ。さっさと立ち去った方がいい。」

男性の言うことももっともだったが、楼青には不可能であった。

「俺、行くあてなくて……」

楼青は村の外に出るのは初めてだった。どうすればこの平原を抜けられるのか、どっちへ行けば街へたどり着くのか。彼が知るはずもない。そんな楼青を、男性は目を細めて見た。

「そうか…。これから私はとある街へ行こうと思っている。そこまですら案内することもできるが…」

「いいんですか？」

男性の提案に、楼青は目を輝かせた。人里まで行けば何か目的ができるかもしれないと思ったのだ。

「ああ。だが、今宵はもう遅い。明日出発しよう。」

男性に連れられて、楼青は夜露の凌げる場所で寝ることができた。テントを張りながら、楼青が尋ねる。

「俺は楼青といます。よければあなたの名前を教えてくださいませんか？」

男性は一度手を止めて楼青に向き直る。

「私の名はエクサス。…楼青といったか？私に敬語を使う必要はないぞ。」

「あ、はい！」

礼儀正しいのか、不必要に体を強張らせる楼青にエクサスは苦笑した。

思えば、エクサスは何も聞かなかったのだ。目の前にいる青年が、全く知らない人物だというのに。

それは愚問だよ

草原の上を鳥達がさえずる頃、楼青とエクサスは起き出した。軽く朝食を済ませ、街へ向かって歩きはじめる。楼青は黙ってエクサスについていった。

数時間ほど歩くと、なにやら賑わっている街へたどり着いた。楼青にとって初めての外の街。道ゆく誰もが楽しげに笑っている。

しかし、こちらを見る彼らの視線は痛々しかった。彼らはまるで腫れ物でも見るかのように……エクサスを睨みつけていた。いや、それだけならよかった。しかし、なかには「悪魔」だの「殺人鬼」だの、数々の罵倒も飛び交ったのだ。楼青は困惑した。自分を助けてくれたこの男性が、周囲の言うように悪い人間には思えなかった。けれど自分はエクサスのことを何も知らない。そうこうしているうちに、一人の男性が近づいてきた。けれど自分はエクサスのことを何も知らない。そうこうしているうちに、男性が近づいてきた。

「エクサスじゃねーか、久しぶりだなあ？この１年間どこほつつき歩いてた？」

ニヤリと笑った表情とは裏腹に、男性の声には憎悪が込められていた。鋭い刀の切っ先が、殺意を隠そうともせず光る。エクサスは黙っていた。ほんの少し眉をひそめて、男性を見つめる。

「何とか言ったらどうだ？エクサス、自分で殺したこの街に、何故戻ってきたー！」

「マキナ……」

おそらくこの男性の名前だろう、エクサスは悲しげにつぶやいた。マキナは刀を握りしめ、黒い瞳をまっすぐエクサスにぶつけた。いつ切られてもおかしくないその緊張感に、楼青は動けなくなっていた。

「悪魔と呼ばれし男は舞い戻る。因縁のこの地に……。体は重く、蜘蛛の糸に絡まるが如く自由を奪われ。他の望むがまま、己が衣服を血で染める。守るべき血で……。」

ざつ、と足音が響いた。声の主は楼青と同じく十六、七の少女で、煌めくような長い髪が印象的だ。彼女の姿に、楼青は思わず息を呑んだ。

「貴様、何者だ？」

エクサスは少女を睨みつけ、低く唸る。少女が答えるのを待たず、楼青は驚き叫んだ。

「レイ！お前、どうしてここに……？」

「…知り合いか？」

レイと呼ばれた少女は、楼青の問いにいたずらっぽく笑った。

「セイ、それは愚問だよ。キミがここで私の助けを必要とすることが分かっていたからに決まっているじゃないか。」

少女は肩をすくめ、人差し指を顔の前で小刻みに振ってみせた。訳がわからないとばかりに、エクサスの顔には困惑が浮かんでいる。楼青はそつとため息をついた。

「なんだ、最初からお見通し、か。」

敵わないな、と楼青は苦笑した。少女はなおも可笑しそうに笑っている。

「楼青、彼女は…？」

突如現れた少女と楼青が親しげに話すのを疑問に思い、エクサスが尋ねた。問われて、楼青は彼に向き直る。

「こいつは俺の幼なじみ、凜麗だ。」

「はじめまして、エクサスさん」

凜麗はまるで指揮者のように大袈裟なお辞儀を試みせた。その芝居がかった言動が、いっそう心を逆なでする。

「何故、私のことを知っている？」

エクサスは眉をひそめた。楼青は少し苦笑してから、彼の質問に答えた。

「凜麗は相手の過去が分かるんだ。」

「…！！過去を知る者、過去視かこみか！？」

エクサスは凜麗の瞳を再度見た。右目が澄んだ空色をしているのに対し、左目が鮮やかな深紅。この、左目だけが深紅のオッドアイであることこそ、過去視の特徴であった。過去視は突然変異で生まれ、その名の通り相手の過去が分かる人物。だから凜麗は一目見ただけでエクサスのことが分かったのだ。

「ところで凜麗さんよお、さっき言ってたのは…」

そのやり取りを聞いていたマキナが、怪訝そうに口を挟んだ。凜麗の言うエクサスの過去が、あの日の記憶と異なっている…マキナにはそう思えたのだ。しかし、凜麗は笑って肩をすくめるだけ。

「それを答えるのは私よりもっと適任がいるんじゃない？」

凜麗はただ、困惑気味に肩を震わせる男を見据えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6251z/>

フュースト

2011年12月20日22時59分発行